

執筆者 =西原 三代志
標 題 =被爆体験について

入市被爆（広島市）、特設船舶工兵第五十二連隊の一兵員として、屍体処理作業に従事。八月七日夕刻から八月十四日早朝まで。

山口県上之関村長島の特設船舶工兵第五二連隊の駐屯地から広島市に救援部隊として入市し、その日の夕刻から星あかりをたよりに、一睡もせず屍体收容作業に従事していた八日の明け方のことです。元安川河口に近い満潮の岸壁に、緋の着物を着た四～五歳位の男の子が母親の亡骸を見送る光景が 50 年経った今でも鮮明に浮んできます。「兵隊さーん！お母さんをどこへ連れていくのー！僕も一緒に連れて行ってえー！」その絶叫を大発舟艇のけたたましいエンジンの音が掻き消し、大発は躊躇う暇もなく舳先を吉島飛行場の突端のあたりに向け、水飛沫を挙げて遠ざかって行った。一人無人の岸壁に取り残されながら、涙も流さないで声をふり絞りたいけなああの幼児の絶叫が、今も胸に深く突き刺さったまま、私を追いかけて来ます。おそらく六日の朝から八日の明け方まで丸二日、一片の食物も、一滴の水も口にすることなく、無人の瓦礫の焼跡で、炎天の昼も暗闇の夜も途方もない時間を、母親の亡骸の傍らでうづくまり続けたであらうその幼児から、私達屈強な兵達は母親の死を理解させることが出来ぬ俛、その亡骸を大発に收容してしまったのです。その上に、涙も涸れ果てたその幼児を保護することも出来ませんでした。いや、しなかったのです。言い訳は決して許されないことですが、遺体の担架搬送開始の七日夕刻より八日の明け方まで、私達二人の初年兵が、まだ生きている人間に作業区域の「中地区」で出逢ったのは、予想もしなかったその無傷の幼児が始めてでした。そして私達二人は、その児に与え得る一滴の水も、ひとかけらの携行食糧さえも持っていなかった。私達は、臆て日が昇り、肉親の亡骸を捜しに通る民間人か、或るいは中隊本部への舟艇の便にその児を托そうと思っていたそのおもいも、暫らくして再びそこに屍体を運んで来た時にはもう、その幼児の姿は何処にも見当らなかつたのです。見渡す限り焼野原と化し、自分のまわりには誰もいない譬えような孤独感と、家も肉親も、頼れるものすべてを失ってしまった深いかなしみに打ちひしがれて、フラフラと何処へともなく行き斃れてしまったのではないだらうかと、五十年を経た今もなお、その幼児の萬にひとつの生存を念じ続けている毎日であります。如何に軍務遂行の最中であつたとは言え、何故私達は人命第一に行動出来なかつたのかと、あの時の断腸のおもいは齢を重ねるごとに益々鮮明に悔恨の思いを深めるばかりです。

元安川流域一帯の中地区の屍体收容作業から更に八日深更、私達の小隊は、似島検疫所に転進し、同検疫所長の指揮下のもとで、翌九日早朝から死傷者の担架搬送作業に従事、そして十日から、「十三日 24 時をもって作業を打ち切れ」の命令の刻限までは、私と他二名の戦友とともに検疫所東南の海沿いの空地で屍体の焼却作業に専従しました。私達は、七日以降昼夜兼行で取扱って来たおびただしい無残な姿に変わり果てた屍体の收容と、極度の疲労と

で、もはや人間らしい感情や感覚も消え失せていて、火葬する傍らに次々に運び込まれて来る屍体の数に追われ、作業能率を上げる為にはと言え、焼け落ちた内臓や肋骨等を、垂る木でこしらえた掻き棒で燃えさかる炎の中に掻き広げ、睡魔と闘いながら、唯ひたすらに屍体を焼く人間ロボットとなり果てていました。天をも焦がす炎天下の火葬もさることながら、夜ともなれば青白い炎に照らし出された後方の小山（※註）の崖に、検疫所の救護棟の中で狂い叫ぶ「ミズー！」「水を下さいー！」「ミズー、ミズー！」の絶叫が、幾重にも重なり合ってこだまする様は、この世のものとは思えない凄絶な光景で、思わず私達は、「南無阿弥陀仏」のお念佛を唱え乍ら作業を続行しました。然し、殆どの重傷者は、火傷や裂傷の手当もろくに受けられず、人を呼ぶ片言の声さえも出せないで、生き乍ら蛆をわかせ、夜露に濡れ乍らひっそりと息を引きとっていかれるのでした。死体焼却専従の私達三人の兵が、軍、民間人別の塹壕様の三～四つの壕で、30～40 体位づつを二段に積み重ね、十日早朝より十三日深更まで毎日、24 時間ぶっ通しで焼き続けたその数は、少なくとも 800～1,000 体位にのぼったのではないかと思います。救援部隊や近隣から掻き集められた民間の救護隊の不眠不休の必死の救護活動にも拘らず、同検疫所では九日頃からすでに毛布・アンペラ・医薬品等も底をつき、炎天下の棧橋の傍らの地べたには、次から次に大発やはしけで運ばれて来る屍体と、屋内に收容しきれない重傷者が、痛ましい姿で犇めいておられました。

如何に有史以来初めての原爆被災の極限状態の中であつたとはいえ、人間として一本の線香も供えられず、塵芥のごとく無惨な扱いによってしか葬むることが出来なかつた事は、誠に痛恨の極みであり、死んでもなお許されることではありません。

そして現在「核」がこの世にある限り、あつてはならない戦乱による核の使用は勿論のこと、平時における核の事故や爆発、そして又、放射能汚染物の最終処分方法も解決出来ないまま、平和利用と称して国が推進する原発、原子炉の重大な事故による放射能汚染の可能性がある限り、嘗めて死の灰にまみれ、その現場に携わつて来た私達は、絶対に手を拱いて安心して死んでゆく訳にはゆきません。

日本は「非核三原則」の憲法で、核の問題はないと言っても、米核戦略を立案し、その後反核運動に転じた米国のダニエル・エルズバーグ博士によれば、「日本が原発政策により今持っているプルトニウム保有量は、英国と同じ量の核兵器が持てる。あと 10～20 年で 100 トンにもなる。これを兵器用に使おうとすれば、米国の核戦力に匹敵する。プルトニウムの半減期 24,000 年の間に生まれて来る日本人が、核を持たないと言う証拠はどこにもない。米国と同水準の核技術を持つ日本は、一週間で核兵器を持てる。その日本を非核国と言うのは誤りである」と、痛烈に日本のプルトニウム利用の原発政策に警告を発している。

ヒロシマ・ナガサキの原爆、その後の核保有国の核実験場周辺の地域や、チェルノブイリ原発事故等により、危険な放射能被爆の実相がすでに明らかとなっている現在、若しもその様な事故が日本で起きたとしたならば、その様な放射能被爆の危険区域に、死の危険を冒してまで、誰が、どこから、救援に駆けつけてくれると言うのだらうか。そして狭い国土に住む日本人は、住み慣れた土地を永久に棄てて、どこに避難せよと日本の為政者は言うのだらうか。

うか。為政者は今、そのことを真剣に考えて貰いたいのです。

そして世界で唯一の被爆国である日本でありながら、「即時核廃絶」と叫んで然る可き処を、歯切れの悪い「究極の云々…」等としか世界に発信出来ないのであれば、せめて今我々国民が出来る電力の無駄遣いをなくするよう国民運動を起こし、原発を一基でも二基でも減らす努力をしない限り、世界の各国は、日本の核保有への不安を払拭し信頼する筈がない。今の俣ではヒロシマ・ナガサキ、否日本の「核の即時廃絶！、世界の恒久平和！」の声は世界の隅々には絶対に届かないのです。

一祈る！「核の即時廃絶」！私達の眼の黒いうちにー。

※註 現在似島少年自然の家広場の南側にある山上に平和観音堂が建っている小山です。